



園からの便り ひぐらし

人呼んで

秋らしい爽やかな空が広がる園庭で、はなぐみ(2歳児クラス)が、泡遊びを繰り広げていた。

水遊び、泥遊び、粘土遊び…手の平を始めた、皮膚感覚を通して楽しんでいく遊びを総称して「感触遊び」と呼ぶ。この感触を味わうという機能は、生まれながらに備わっているものではない。硬い石ころを掴んだり、冷たい氷に触れたり、紙をクシャクシャと丸めてみたり…そんな他愛もない日常の遊びの中で、様々な刺激を身体に入れていくことで、磨き育てていくもの。だから、特にこの2〜3歳くらいまでの間に、色々な感触遊びを、たっふりと楽しんでいくことが重要なのだ。

なので、この泡の感触も、初めての頃は、子どもたちにとって相当に気味の悪いものらしく、はなぐみでも、春から様々な感触遊びを展開しながら、最近になって、子どもたちも、この泡遊びの面白さに気づき始めた所とのことであった。

それは、感触もさることながら、ふわっとして重さを感じないのに、粘土のように形が崩れないという、泡ならではの不思議な特性にも、興味を奪われているからに違いない。それは、個体や液体の性質といったものが、だんだんとわかってきていることの証。目の前の泡は、そういったものには当てはまらない、独特な振る舞いをするから、面白いのだ。

この世に生を受けてから、この数年の間に、身の回りの多種多様な素材に触れ、関わってきたこと、つまりしつかりと遊んできたことが、次なる興味や関心の扉を開いていくのだ。

さらに、担任たちのこだわりは、三原色に着色した3つの泡を用意したこと。もう少し年齢を重ねると、色水遊びの中で、「青と黄色い水混ぜて、緑の水!」といった、混色遊びに興じるようになるのだが、泡の場合は、カフェで提供されるラテアートのように、完全に混ざり切るまでは、なんとも言えない淡いマーブル模様が楽しめるというのだ。

なるほどと感心しながら、二色の泡を入れた子どもたちのカップを覗き込んでやり残してきてしまった遊びは、必ずどこかでやり直しておかねばならないのである。

とはいえ、この年上の子の泡遊びは、観察力、洞察力、表現力もずつと巧みなので、ずつと豊かな見立てや探求心で、遊びをどんどん広げていく。

結果的に、はなぐみの子どもの倍以上の時間、夢中になって取り組んでいた姿には、歳相応の逞しさを感ずるので。反対に、はなぐみくらの2〜3歳の頃は、ひとつ所にじつとなんて、そこそこの時間で十分だ。それより何より、気の赴くままブラブラと、あつちでは油を売り、こつちでは首を突っ込みと…そう、あの「フーテンの寅」のごとき生き方こそ、忘れてはならないのかもしれない。

園長 折井誠司

いると、そこへ水を流し込んで、「ビール!」。別の子は、泡立て器の中に溜まった泡の中に、落ち葉をさして「ほら!」。だんだんと、それぞれの遊びへと変化させていく子どもたちの間を、ふらふらと渡り歩いているうちに、ふと気づくと泡遊びのメンバーの大半が、4〜5歳児へと入れ替わっていた。

実は、遊びが始まった頃から、遠巻きに眺めているこの子たちが、私も気になっはなぐみの子どもたちが、三々五々別の遊びに移っていくのを見定めながら、するするっと、遊びの中に潜り込んできていたのだった。

かといって、多くの4〜5歳児が、ここに殺到するののかと言えば、ほとんどの園庭のあちこちで、それぞれの遊びに夢中になっている様子。自分たちも



経験してきたこういったシンプルな感触遊びは、今では、少し物足りないという子ども多いのかもしれない。

しかし、たまたま、その機会を逃してきたのか、今がその育ちのタイミングなのか、どの年齢であっても、こうした遊びが必要な子どもたちはいるものだ。

子どもたち(ヒト)の育ちには、順序性というものがある。今、やりたがってることが、丁度その順番が訪れた育つべき部分。赤ちゃんが、やたらと物をいじりたがるのは、指先の機能が育とうとしている段階だから。ヒトは本当によくできている。

しかし残念なことに、その時々の子どもの段階を一つ飛ばして先回りすることはできない。その時々に必要な遊びをせずに、「育つ」ことはできないのだ。だから、

●編集 幼保連携型認定こども園せいび
●発行人 折井 誠司
●印刷所 折井 誠司
●発行所 幼保連携型認定こども園せいび
社会福祉法人 誠美福祉会
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2
電話 042-6975-1155
ファックス 042-677-5643
Email seibi@kodomonokyo.jp
http://kodomonokyo.jp